ここしたい

白家　并一

詞を名とする

[V. 43]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 43
copy 1
Asian
Japan
Large

2004551302

業世戈の出のるまき　後紅梅大臣之

そ此梅家大納言ときこしめしは、なほ枝仕のおとゞ也
次良なりけせ給ふし白河殿のさしつぎよりこそ
ありけりくしうもあるやうなる心ばへもれし給し
人よりてなりのぼり給ひし月ゐそへて、まいて
いとまほうひありおとゝまたしうまてなし此
業にいとやんごとなりけり小方ゆゑりもれし
給しをもとより此もなくなりなていまも給し
後のおほきおとゞ大臣の此むすめ、まさごらしらもなれ
がくし給しあらぬ或業ノ文人兵衛の文にて、なほ兵衛の
尉こそあまたせしそれのへりしを、螢こゝうをもて後、悪び
つかひ給しかど、紅梅ノ辛月ゆれどえさしもも

むかし女ありけり。此子は故少将の御もとにてと。
二人の子ぞおはしければ、さうざうしとて、神仏に
祈りて今の御子ぞ（桂枝）おとこ君は御うまごの人。
右（定）大臣の御むすめ女君一所おはす。今そ申ば
これをもおほじぞ心（紅梅ノ）ぐるしく思ひけるを。
そのくれうの人（故少将ノ人之）ならどもすこしおほえぬ心
ばへうちまさりちかくめぐらしもいぞらう
せぞあれど。かの（桂枝）きさいともきこゆ。いままめき
さる人にてつきちかくよりちかし。我れくはえ給ひ
うしろめたきこともおぼえしことさなめり。あ
かきのへだ。笑くしてめやすかりけり。（紅梅ノ）ゑぐら

おちじ行ますすぎくおとなび給ぬれば此もなどき
きそまろり給七ゝんのきん殿ひろくおほきは
つくりて南おもては大納言殿のおほひ君西は中の
君東は宮の御かたとすまきなりめへり大かたは
うちとおほどは ちしゝやのおもきぬ心ぐるしき
やうなれどこちらゝなるのれたしゝ物おほくなど
きて 内々の儀式なほなどうろくけたくなど
もてなして けりひあしまほしうおかす 例のかく
りしづき給ふきこしありてつきぐにきたるがひけし
ふきこし給人おほく 内 去宮より此気色あれど 内 は
中宮おりしますいかばかりの人は 彼此けりひは

なしびまゝんさりとてもひとりひげをんもうひ
なるべし。其家には右のおほ(タ)いとの女は。なしぶ
人なげにてふしひぬふは。さしろひよくなれど。
されこいひてやはひとまゝんとせふ。女子を
家づくへまゝこでは。なるまれかいうはあらんと
そしたちて。まいらせ(其家へ)なりぬふ。十七八(紅梅ノ嫡女之)のほどにて。
うけくしう白ひおほうる心ちしぬへり。中の君を
うちすゞいておてまなまめしうずゝしうさ海は
まさりておしうおりすれど。こゝへにてはあらう
しうこせまうきれさ海を。兵(白)ゆのみや志さを
そしらうばなどぞ。そしらうこれ(桂柱ノ脇大史)あぞゝとうち

まてなどこつけ給ときはめしまともしこゝろゆれ
がてきこし給心だんありて、たくをしもらうて
まゝいたいつきなり、せうと紙こでのこはえやまじ
と、大納言は中をまなどのおひかくるを、さなんと
きゝぬればうちゑらて、いとかひありと思しこり、
へはおらしん安づんよりは此安ましてはよろし
かん女子はこせしてまつらまほしかれ、こゝろ志
ゆくはまゝをてかしづきてこまんは、命のびぬべき
安のれさ面なりとのおひなぐら、先妻安のれこと紙
いそぎなて、妻目の手のれことりも、けが世にや
まし出さて、おいとゞの院の女れのれこと紙、むね

いくそしてやえましあるぐさめれこともあら
なんと心のうちはいのりて（嫡女を長文へ）家をなりぬりいと（比）時
めさ給よしへぐさも。かゝ家れまじらひのなれ
給もぬほどまもなくしきれうしろこちくては
いかゞとて（桂狂）お方（嫡女）そひてさふらひのへバ。ようとまかぎりも
なくせりしづき。うしろ（中ノ志）ゆ見給。殿（お稚ノ伝さんこ）いつれぐなり心ち
して。西のれ（中ノ志）ゆらはひとりはなしひのていとさう
ざうしうちなぐめ給。東のひめ（末ノ伝方）ざこもうとくしく
うくこゝもてなし給りで。よりくはひとこゝろは
れとれごもりよろ。川のれとしたひ。もうちきれ
（あそ）遊びけぎをもこゝろを（末ノ伝方）師のやうはせ申てぞ。雅も

すゝひわたひ給ける。物もちかきとせれつるみちなずし
みて。母少将よりは。さやうにはおさくもしむらひ
なり給はず。さるまてあまて給まれりし。
心ばへけむひのむまれさせ給はず。おいぼらやう
つきのくるしさに。人よりすぐれめでたうち
まいりやあきらや。紙かいさせ給をのこさいそくやう
ちかも心うくしちかど。笑して。さらへくしさ給る
そしさこめて。ののへおちしくしくそ川なら
まうしめと。母君にも中にし給れどもさしまさやうの
せづみさしさせ給。ふさけくさしもおろめくししさ
かれば。ちかくちかくふとは。こころぐるしかるべし。

我すくこゝはまかせて。世をはおもんぱかりこそ
まつしん。後ぞ哀はうきころめされども。よをそむく
うきうきもなされづ。人はおもひけれ。とく
かくてすずしき給ふらんなどうちちかはして。我心だちをの
むかやうなることをぞ。またて給。紅梅心 いづれも身をぞ
おやどりの人ども。我かうちをまぞやとゆかしうおぼ
しそ詞 くれ給ひてころうされと恨みて。心 人をも知れず。
きし給ぬべしやとのぞきおりさめ人ども。文ノ佳方 かえてゐる
そばむづまえことなり給はず。桔梗 紅梅詞 うへおりをぬけどもはうち
きらりて。来りくべきはうとくも。おぼしもなく
我ぞしなるれば。こなつくしてそちゞまさて。地 こゝすれ

まへはぬのへべれ（若宮）つゝへなどはのゝまえよし給ひに
思けさひるどあそはわしう、さ海くちわらひ（弘徽ノ）
やかてあかれはみゆる人のあありさ海なり。さもが
れひのめざましうち給、人にそさうしとおもひどこれどこの君に（安佐宮）
きこしもまきこしすやおもん。かれバそ世中のきさ
うちハリがうつしけれ、さびしくひあはしどもすみけり。
まさりくさもそのづつあわりめべかめりあど、いとゞ
いづしうさひこえしぬに（桐壺）月ごろあるまとまなく
物さげしま給は。れ琴の音をさうまうけ給もうして。
ひさしく女御給なり、西の方に給らひと（中宮）いびうち給
ころまはつれて給ら、さもまびうつべくやなと

三五

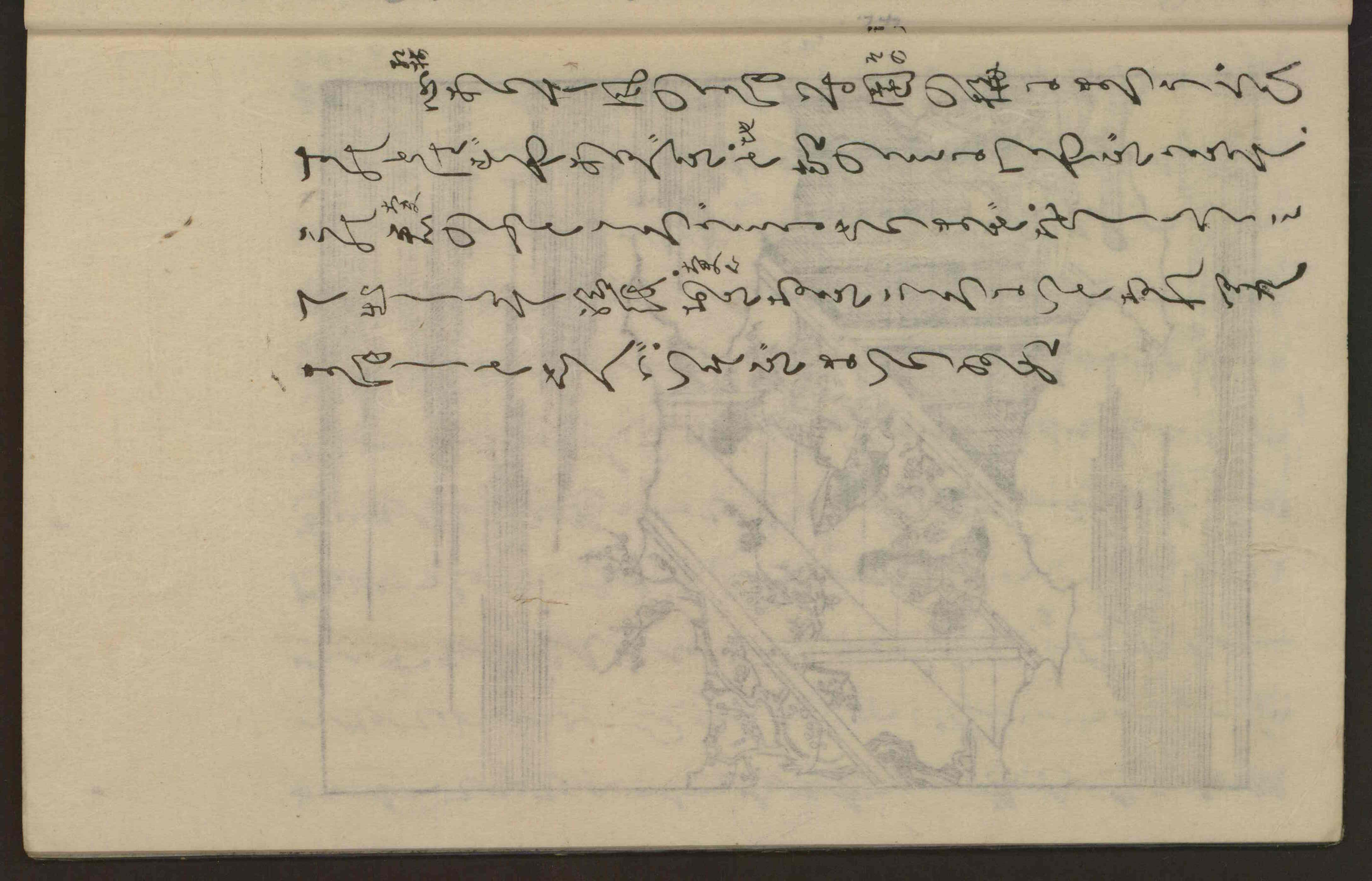
侍しん。な面うさほまたろ。すまくさ袖の音がら
なり。おなじくはれこころとじめてをしへさせぬへ。
おさなかいとりしそく。なし姫袖侍しざりしかどその
うささりなりしよ。おそび侍しちしまや。さく
しるごとりのさきまへいなまごとまもいとつきなくい
侍しざりし紙。うちとけてもあそばされど。時じ
うけ給ちれ既(び)琵(い)の○なん。昔見て侍り。右六(源)条院の
れつゝへまて。右のおとじ(タ)なん。此此世まゝ詠りぬへ家。
源(芸)中納言。(白)芸人の家。なまごとまも昔のひとり
をとりまじう。いと頼りことまも此し給人ごまて。
あそびのゝへいとりあて。こころとじ先ゝまへるを。

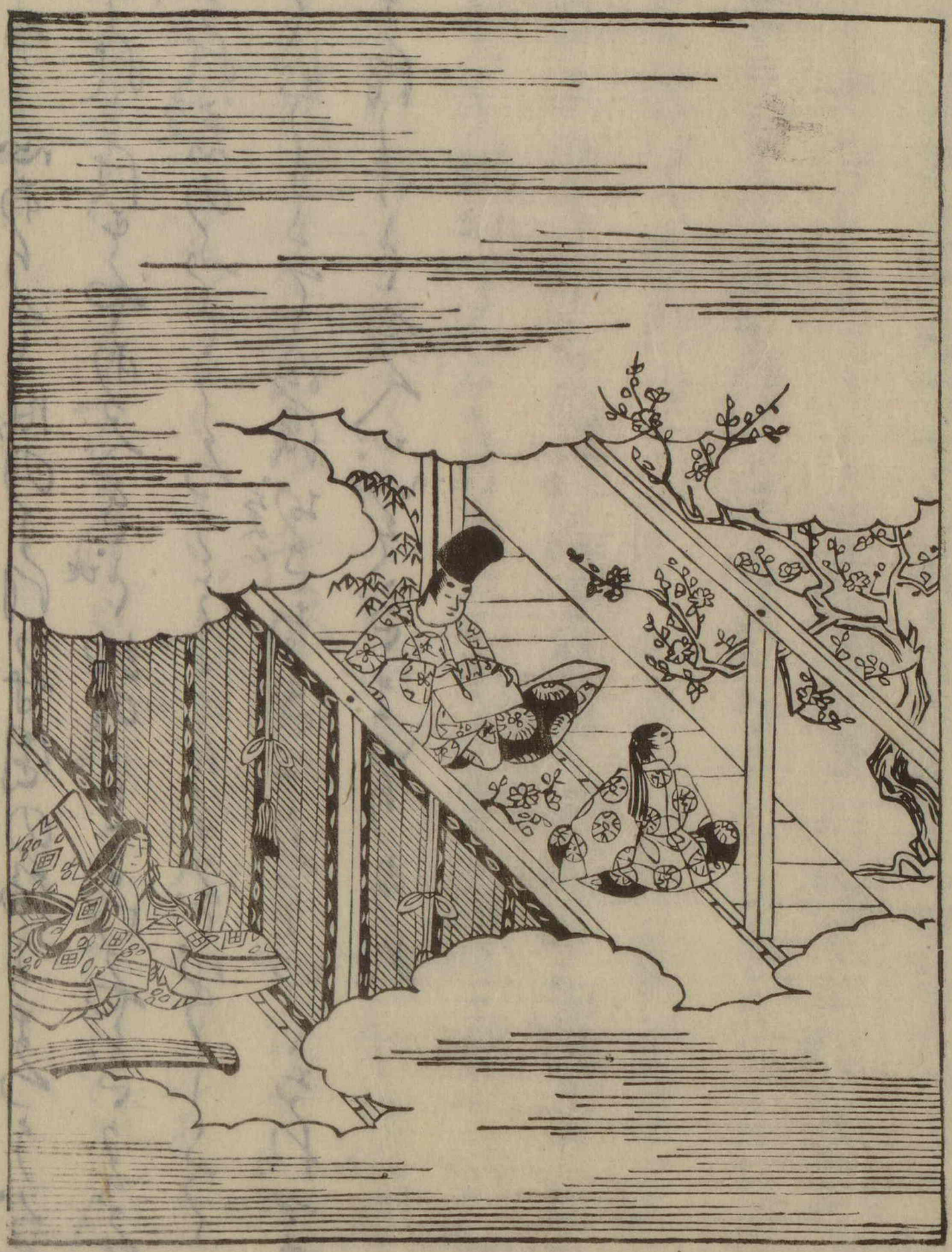
てげかひすてしなくびこうだちをとなん。おとゞ
ほほとよび給ひずと云のふるを。これ（家ノ方）はことのひこ
ゑいとよくおぼしのへれ。びたくをしてしげやか
なるをよきまするもれなるゝ。ぢうさすほどだち
とよれさ夜ふりて。お夜めしうさえしこうなん。
女のことまて中くおしりけるいであそだ
さんや。はことまいれとのゐふ。女房（家ノ方ノ地）おすどは。かくれ
なるもおさくなしいとつきごらうごけが。こゝ
にてまつしじとしふりしも心ままをてゐこれだ。
（羅詞）さふしふ人さへかくもてなすが。やまりしぬとも
ごち給ひ（大夫）ぢ（今上）うちへまいしんと。これゐすゞるまて

まりあへるかぎりのことゝきこゆるもつと
一おしこえてのりしくうけしとかげしきり
麗景殿(れいけいでん)まれしとつけさせて給ゆづりこさせて
こゝろひとえまつろまじくおやましくちんとさせて
よそのさまのて留すらつるまられともすれど
御前(ごぜん)の御遊(あそび)まめし出つうしくるもしつくしやまぶ
いとわくさかえをとるちゑさせて双調(さうでう)あんせ給
ほと也しうあいあへどくしうへおもずちりゆけ
じゝれつくりまそどれつうしきれまありすうけちり
あるゝさあやきさせあへとしおめこえてうまへど
らりしとかげしこう氣色あぐしうつまびさまつと

しくあはせてこゝすゝしきなし給。うはぶえよ
つゝよなれたる声して。これ東の川まゝのき
ちかき紅梅（こうばい）のいとおもしろく匂ひたるをえ（鶯ノ）なて。
（同 家ノ中方ノ）おまへの家。こゝろぞ人ありてこゝもめり。（白）無下の家
（今上）うちよかりなり。一枝ありてまいれ。しろ人でしろ
とて。おもれひかる源氏のいとゆかれさりの大将
などよおもしをしれ。けしきまてやうまてまじら
ひなれきてしこそ。よとしもよ忘しう侍れ。（白芝）此君
ぶちをよれ人もいとことよ忘きてげる人よめで
られんと此ゆへるれありさ版なれどもさしがり（端 端）
よも見し給ふ物ハ。れたぐひあらじと忘まれし

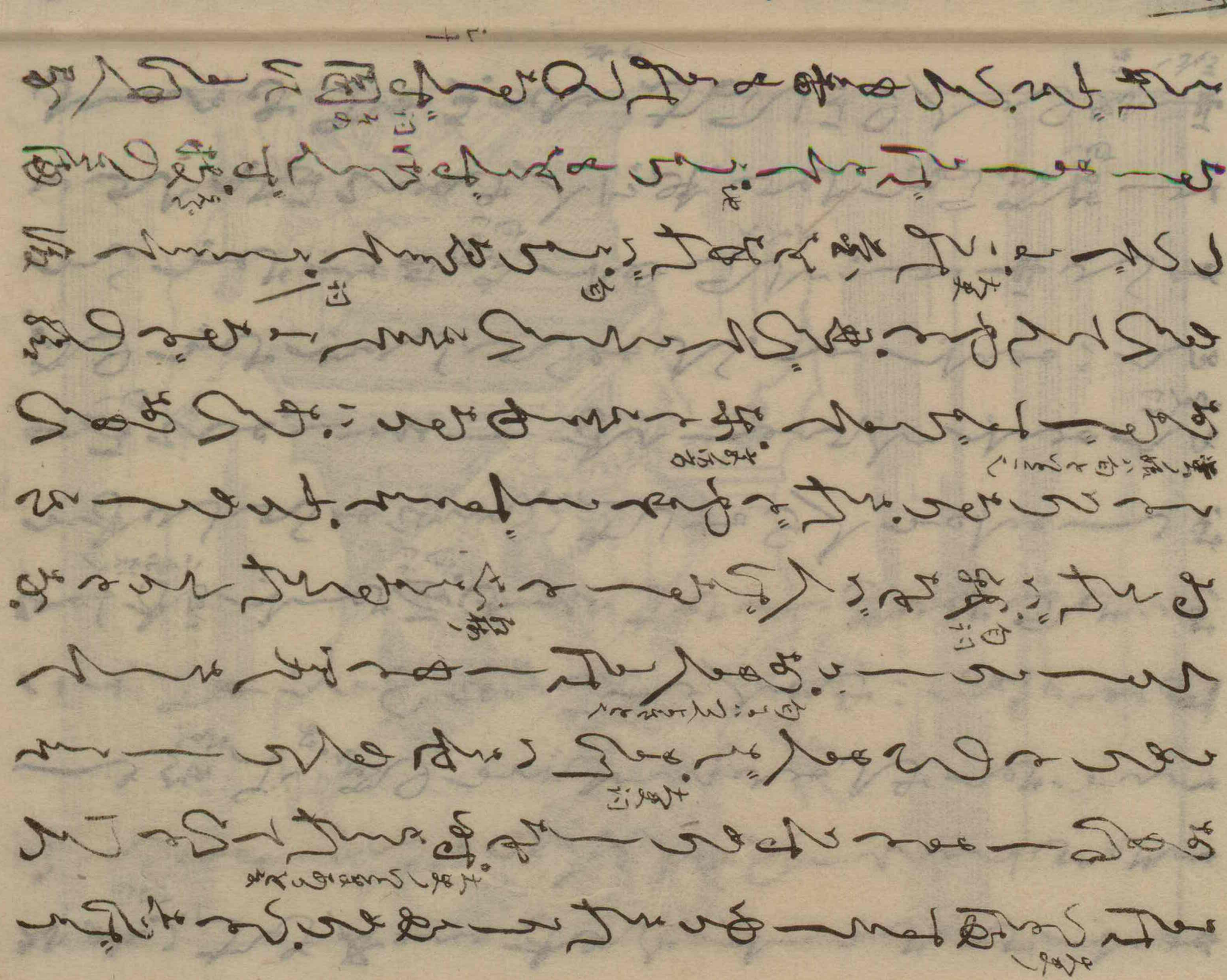
心のちしまやありけん。大くるまて出なりもひ
あく世ちくりちしきをけぢうき人のとくれなりて
いきめぐらふいおぼろけの命ちがさちしじりしと
とそおぼし侍れちど。罪し出ぬて。おれ衣ますぐく
せひめぐらし志ほれ給つ(地)ぬでの志のびがくき
まやまれおしきていそぎまいしを給。いかぐいをん
むりしれ定しきけ(浮)りくとまは。此交(旬)ぢりしそハ。仏乃
りれ給まさんは名称ハ阿(あ)鼐(みん)が光もちちりんを。
二たび出ぬへるかとうたがふ。さしさひぢりのあり
けりをやしまぐふまちけぐらろ。さそしとか(れこ)とうさん
りしとそ





中宴（四名ノ地）のうへの御つぼねよるは御ぬぎころ
ゐり（匂ノ）御給ほどあり。衣どぐあまる御をくりに
まいる中ゐりこうけ（大夫を）ぬて。（白詞）昨日もちどいと
とくはまゐでゐし。いつまいりつるぞちどの給。
とく（大夫詞）まゐでたべりましくやしさり。まゐ（白ノ）内な
かりしまゐとへのつれば。いそぎまいりつるやと
おさまげちる物ゐなれきも。（白詞）内ちしで心や（二条院へ）すき
所まも時ぐはあそべかし。ゆきひとぐもれ。そこ
もうとあくあつまるところぞとの給。（地）一つ此（大夫）恵めし
ままちてくらしひぬへば。へぐはちうもまいし。
まゐでちりちどして。志めやかな此ぬれば。（白詞）去文

まはいと（大まノ）夜すくしゆうされりしぬめり。いとしげう
おもほしまとりすめりしを。時（大まノいとまあるとき）とられてひとつろ
かめりとのるまへだ。まれ（大史詞）いさせぬへりしこそ
くるしかりしか。おもへ（白まハつくへときとく）ほしもと冥さして
ねられば。秋（白詞）をばへげるしとぞ（白藤ノ）ゆるされたるとな。
ことりちり。されどやまとしずこそおろめしき
（黄ノ姫ハ白といとこそ）おもしすぢまて。東（まノ仮名）ときゆるはおひおもひ
ゆひてんやと。悪びてくしひきてこなどの絵
つゞくに。これ（大史）を。なれば。うち（白）ゆるして（詞）ゆるして
なしましけばとて。うち（池）もとしずゆるんず。投（えぐ）のさ面
されずさいろも番もよれつゝなしず。周（詞その）にまほへな



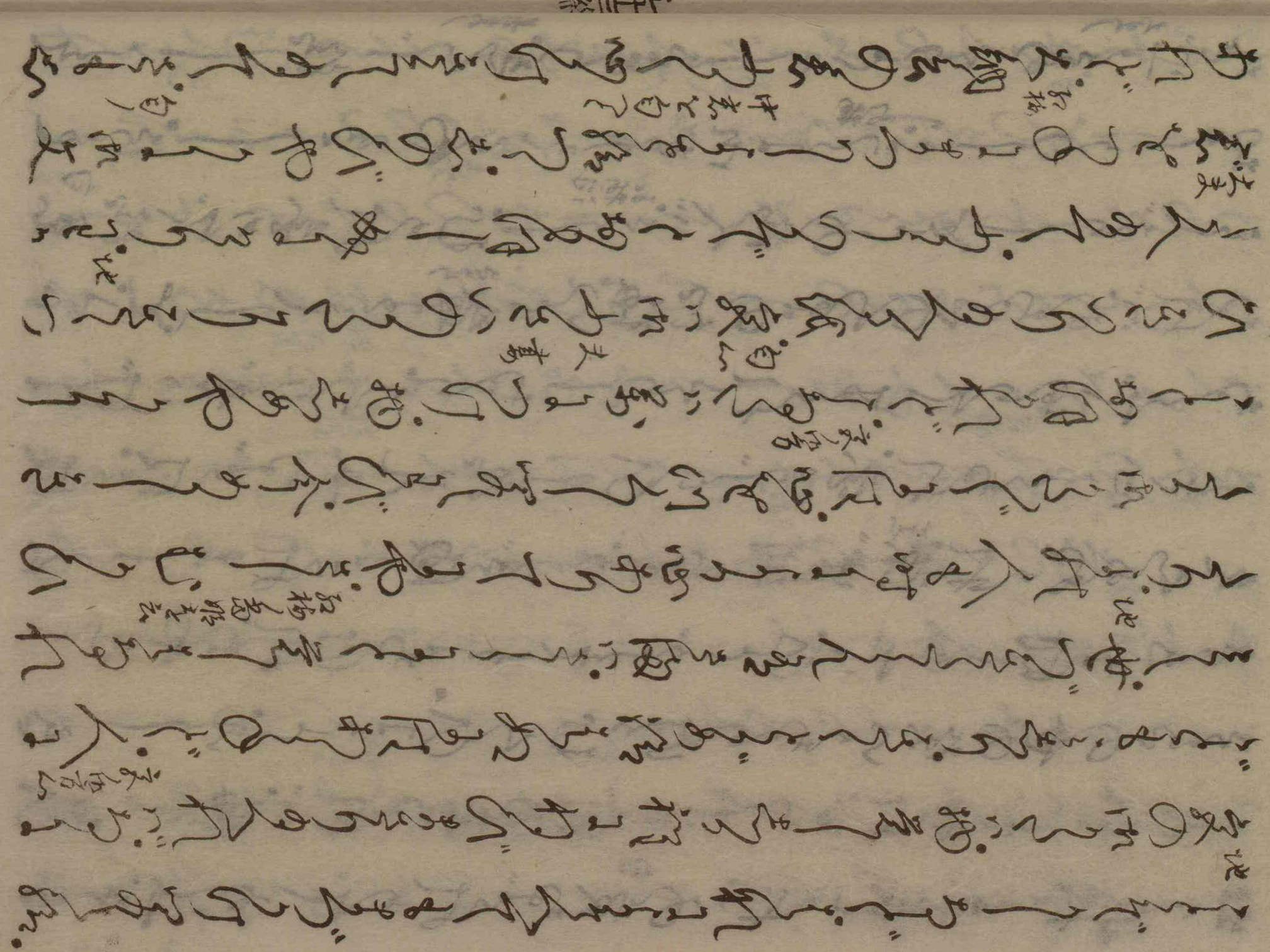
紅の文まとられて。香なんしろき梅にいをとれると
いふめりを。いとうしうとりなしべてもさ紀かう
れとて。地ころとじめのへる菓なれば。ひありても
てもやし給。白汀と取いとれねなめり。やがてこなるに
をとめしこめつれば。大まん東宮にもえまいらず。菓ももぶ
りしくしぬべくうぢしくて。けぢかくふきる南
へる紙。ひきこうちにはさぐひなくうれしくおもつ
しくしきこ也。白汀これ菓のあるじいなど。東宮には
うけろひ給いざりし。大まん詞しきぐ。こころしらん人になど
よそ。きく給りしうれとかたりきこ也。白ん大納言の御
心ぞ人は。中宮と白にまいらせしきとのん我ならざ海にしきべかめれど。白梅ノ文ノ作方と きくあませ

ぬへとしむふ心ハことまたしこゝぬれバこれくりこと
中宮とも 文ノ仏方とも
けざやうまものゆひやしず 河(地)とめてこれ 大夫 きこの
まうづるまお紙ざりなるやうまて
白
菩のかまさてもれぬべき身なりをばかぜれ
たりをすぐさましやハ 詞 さてなる紙いまハおきな
どもなさしらをさせで志のびやうまとうへとく
のゆてこれ 大夫ん 志も 文ノ仏方 東のをバやんごとなくむつましう
むましくり中こゝとうくの 大夫ノあね達を云 姫 志ハこゝ給ならど
して例のちしうしのさ海なれど口くハ心ちま
いとを 文ノ仏方ノ もりうまおしまほ志うおもする心ぞんを
ひあるさ海まてこまもうがやとむありくま其実乃

蘇東坡

けふのはこ菊やまもてなし給ふけて。おもはじ
こゝにはおすくちかし。はしのおすくちかし。みれたし。これ（文公方丈へいづれへうるせ）
もやどぐるうだしてこなしげやとはおりくる。
うれしさきれのつゞきり。これは昨日のけふへま（去文詞）
あれがことなつ。かきげなものゝへかれ。おもま（少陵詞）（自ノ）
すまるへるはすくのへるをゆかしとてしずか
あめそだのおりしも我しげことなつはいとまれまあ（タ）
やりまれころおりあめのつくそおかしくれ。おかしく
まちんまうしひきへるれさ夜をきてあそてまめ
ずち給ふんもかし。すくちやなきましちがもり
うごちて。なみとまつしせ給ま。まる（ちまと）

をばすさめ（ちまノ）ゝりとゝしきさり。ぎんじ（甚夫ノ）給しこそ
おしうりしが。うゝ（和梅）ま山をうそこやまさしし。さを
こしざりしをとの給へば。さし（和梅詞）。むめ此菊めで給（白）
なれば。おちこのつまの紅梅。いと盛（さう）まこししを。ぐ
なるでおりてまれたりしちりうつり者ハげま
しそ心ことなれ。菊まじらひし給へん女などは。さは
えしめぬかれ。源（芸）中納言もかうざ海にこれましうん
こきまはしきで。ひとがこそよまなけれ。おやしう
さきの世の契いかなりけるむくひにこと。ゆしき
ことまこそあれ。おちじもれの名なれば。梅もおひ
出かんねこそ衣なれ。この（白）文などれめでのふ。さな



たちての給ことあらばとかしきたり心まりかし
給をうるにいとおしうひさぐべてかくしひよう
べくもあらぬかくしもなげの玄の葉をつくし
給かひなげなることに小方も見ての給ちかなされ
ゆりなどもなければまなじの山心そひて如ほし
やむべくもあらず なまかは人の山ありさ夜などかは
さてもこまらまほしうおひさ紀とをくなどいこ
させなふまなど小方おもほしよる時ぐあれど
いといたう見めさなてかかひ給悪び所おほく
八の宮の姫だまもはこうろざしあさかしぞいと
たげうまんでありさ給これもしげなされこうろの

69038
6AP78